

どこの大学、会社に入ったかではなく、 社会で力強く生きる生徒を いかに育てるか

青年期の心理や学生の学習と成長などを研究してきた京都大学・溝上慎一先生が、2015年4月から、桐蔭学園(神奈川・私立)の教育顧問となり、アクティブラーニングを取り入れた教育改革に取り組んでいることが話題になった。実践の場を通して、大きな社会の動き・大学の動きから見た高校教員のあり方など、率直に語っていただいた。

学校教育の社会的機能が変化 生徒の仕事・社会への移行が課題

教育の本質は、生徒たちが社会に出て、力強い大人になることを第一の目的として育てる。これに尽きると思います。

そもそも江戸時代までは、支配者層の子弟教育と一般的な寺子屋での教育は異なるものでした。それが、明治以降の近代教育では一つの流れになり、それまでの支配者層が学んで社会につながっていく教育が、あらゆる人を対象に行われるようになりました。家の仕事を受け継ぐだけの人生ではなく、学校を通して、人生がいろいろ見えてくる。特に1960年代以降は、多くの人にとって、どういう学校で、何を学んだかが、将来どのような仕事をしていくかにも影響し、それが人生を大きく左右するようになりました。学校に行くことが当たり

前となり、学歴や、大卒でもどこの大学を出たのか、いろいろなブランドや競争力のある大学を出ることが目標になり、進学が人生を決めるという価値観も一般化しました。まさに今、教員をしている先生方の大半が、このような時代の中で育ってきています。

しかし、世の中の大きな流れでもあるグローバル化や情報化、ビジネスの高度化・専門化など、多くの社会的要因の変化に伴い、従来の考え方が成り立たなくなってきています。そして、学卒者の無業やニートなどの問題を、社会が無視できなくなってきたことなども背景に、学校から仕事への移行における構造的な問題が指摘されるようになりました。まさに、「学校から仕事・社会への移行」(移行)が大きな課題となっているのです。それは大学だけに限ったことではなく、学校教育全体の社会的機能が変わってきているということです。そのため、教育の出口における職業選択や、どういう社会的役割をとっていくのかということに、教員は大きな責任をもつということを、改めてしっかり理解する必要があります。

社会への移行に必要 3つのポイント

トランジションにおける重要なポイント





ントは、3つあると思います。
まず1つは、「主体的な学習姿勢」。
授業時間など与えられた時間を超えていく学習姿勢を、いかにもっているかどうかですね。言われたことはやるけれど、言われていないこと、直接関係しないことはやらないでは、社会では通用しません。入試に出るからではなくて、出なくても主体的に関心をもちて探究するというような姿勢が重要になります。そうやって、頭の中にいろいろな知識が蓄積され、さまざまな活動や多くの人との出会いを通じて、ある日「そういうことだったの

か」とつながる。そこにイノベーションが生まれるわけです。つまり、どれだけ与えられない学習をしっかりとやるかという学習の姿勢が重要になるということですね。
もう一つは、「対人関係やコミュニケーション」です。これは単なるおしゃべり能力ではなく、ちゃんと知識や情報を媒介とした課題ベースのコミュニケーションがいかにとれるかが重要であるということですね。そのためには、社会の課題を解決していくための知識や情報を集めることも必要ですし、いろいろな人たちに自分の考えを伝え、相手の話をしっかりと聞くことも大切です。そして、多くの意見や情報をすりあわせて、人々をまとめていく。このような経験は、部活動やアルバイト経験だけでは難しく、学習を通しての他者との協働作業が必要になります。だから、高校や大学において、社会とつながるプロジェクト学習など力をつける意味があるわけです。

普段から大学生を見ていると、グループワークを面倒臭がったり、しっかりとやらうとしない人が半分くらいいて、そのような態度は、学生自身の学習の大きなネックになります。高校時代から、アクティブラーニングや学校行事への参加などを通じて協働作業に慣れ、その能力を育むことは、非常に

京都大学高等教育研究開発推進センター教授
大学院教育学研究科兼任

溝上 慎一

みぞかみ・しんいち ● 京都大学博士(教育学)。日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事なども務める。2015年4月より桐蔭学園教育顧問。専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事へのトランジション)。主な著書「現代青年期の心理学―適応から自己形成の時代へ―」(有斐閣選書)「どんな高校生が大学、社会で成長するのか」(責任編集・学事出版)など。

重要なことだと考えています。

3つ目は、「将来の見通し」というキャリア教育の部分。そもそも、将来の何のために勉強しているのかということとを自覚することが、とても重要になると思います。

大学生でも、将来の見通しを立て、未来と現在をつなぐ力をつけると、驚くほど意欲的に行動し、さまざまなことを貪欲に学び、強くなっていくのを目の当たりにします。キャリア意識は、そういう意味で万能変数といってもいいでしょう。

どひとつで終わってしまうのが大半です。

それは、将来をカテゴリー理解しかできていないからです。重要なのは、そういった仕事や役割と、自分の経験やこれまでの人生とをつなげて一つの物語にすること。それがなされて初めて、具体的な次の行動につながるし、本気になることができる。そういう「つなぐ」力を育むことが重要だと思います。

多様な価値観を尊重すること 生徒の将来がどうなるかは別のこと

このような社会とつなげていくことを意識した教育において、アクティブラーニングは必要不可欠になってきました。アクティブラーニングのあり方そのものにはいろいろな議論が必要だとは思いますが、アクティブラーニングなという選択は考えにくいことです。そんな話をしていくと、「話はできない。声も小さい。でも、もくもくと問題を解いたりする生徒がいて、そういう生徒の価値観・存在を尊重していきたい。なんでも社会につなげてアクティブラーニングという先生の話には賛同できない」という意見を頂戴することがあります。

それぞれの先生方の教育観や価値観はもちろん尊重します。しかし、そういう生徒が、大学や社会でどのくら



い力を発揮できているか、考えてみてほしいのです。多様な価値観を尊重するということと、その生徒が将来どうなるかということは別です。大学では、そのような生徒が社会で厳しい状況に置かれる確率はかなり高いという事実を知っています。残念ながら、

社会で求める力というのは、確実にあるのです。なかなか意見を言えないなどの生徒を「できない」と切り捨てたり、「個性」として見過ごすのではなく、社会といかにつなげ、大学で主体的に学び、力強い大人として社会で仕事をし、生活を営めるようにするか。そのためには、ちゃんと話をさせなくてははいけません。「あの生徒は、コミュニケーション力はないけど成績が良いでOK」ではなく、華々しい発表ができなくても、発言はできるように

らなくては、大学でもダメになります。アクティブラーニングの取り組みは、そのような、将来成長していくことを目指した教育なんです。

生徒の変化、成長を 実感できる瞬間がやりがいになる

神奈川県・桐蔭学園において教育顧問として取り組んでいるのも、そういう社会とつなぐ力を育成する挑戦です（コラム参照）。同校では、近年中に中学・高校のすべてのクラスでアクティブラーニングを行うことを前提に、まずは、中学1年と高校1年の全教科でアクティブラーニングを導入した授業展開を、4月から行っています。最初は、非常に積極的に自ら考え授業を工夫しようとする先生と、戸惑う先生、「やりたくない」と拒否され

る先生の3タイプに分かれました。しかし、実際に授業を行うと、明らかに生徒の反応が違う。
「生徒がこんな顔をするのを知らなかった」

そんな驚きの声を、4月にたくさんうかがいました。そうすると、懐疑的だった先生方も変わってきます。また、授業の中だけでなく、夏の遠征合宿のバスの中で、生徒が「じゃあこれはペアワーク」なんて無邪気に行っていたそうです。つまり、すっかり自分たちの技術にしていたんですね。そういう様子を見ると、「私たちがやっていることは、生徒のいろんな力になっている」と実感できます。やっぱり教員にとって、生徒の表情の変化や成長が、一番のやりがいになるのだと思います。

また、教科だけでなく、LHRでもアクティブラーニングで互いに支え合う温かい雰囲気づくりに取り組んでおられます。そうすると、前述のような「話ができない生徒」が、ポツリポツリと話を始める。私も実際に、そのような生徒が授業の中で、前に出て発表する順番に当たってしまった現場に立ち会ったことがあります。最初、生徒は教室の前のはじっこに立ち尽くしました。その瞬間、グループワークでいろいろな方向を向いていた生徒が全員、その生徒のほうに体ごとしっかり



神奈川県・桐蔭学園の取り組み

2015年4月から、3年計画で中学・高校すべての学年でアクティブラーニングの授業が実施されることを目標に挑戦が始まっている。まずは、中学1年と高校1年の各教科担任の中から30人(+約10人のプレストーム教員)のアクティブラーニング推進委員が選出され、溝上先生とともに、アクティブラーニングを取り入れた授業に挑戦している。「これまで、教科指導はあまりに『個』の先生に頼りすぎたところがあったと思います。しかし、生徒主体の教育を考えたとき、これまでのような授業のままではいいはずがありません。教員も学び続け、学び合う。そういう姿勢は、



必ず生徒にも伝わりますし、生徒主体になれば、生徒はイキイキと笑顔になる。それによって、『教室が楽しい』場になることも非常に大切だと思っています」(入試広報部長・佐藤透先生)

学校概要：幼稚部から大学までを擁する私立学園。中・高校一貫の中等教育学校の他、中学校男子部・女子部、高等学校男子部・女子部など、専任教員だけでも360人を超える大規模校。



研修後も、あちこちで教科を超えた先生同士の話し合いが自然発生的に。同校では以前では考えられない風景だとか。



アクティブラーニング推進委員の研修風景。授業評価とそれに対応する授業案などについての熱い話し合いが行われている。溝上先生は、その様子を温かく見守り、時に鋭い質問で議論を深める。



向けて、話を聞く姿勢を示しました。そして、「ひとことでもいいよ」と優しい声がかかる。こういう雰囲気づくりは、授業だけではできません。そういうクラスづくりと、それを踏まえたアクティブラーニングの取り組み。それを大真面目に取り組んでいるからこそできる。素晴らしいと思います。

結局、長い人生の中で、何が大事かというと、人と一緒に何かを行う「協働」だと思うのです。そういうことを、大学生になってから話してわからせるのは大変です。でも、高校ではできないというのが実感です。人が変わるというのは、とても大変なことです。それは、変わることで自分が大変なので

はなく、変わる機会をもつことが難しいのです。ですから、高校時代に、そんな「変わる機会」を生徒にたくさん与えることができるのは、高校教師の醍醐味なのではないでしょうか。

デルケースづくりの挑戦です。その中で特に、「活用」段階は、教育学者の安彦忠彦先生が提唱する「活用Ⅰ」と「活用Ⅱ」に分けた概念をベースにしています。ちなみに、活用のなかでも、「活用Ⅰ」は習得との関係の比較的強い学習のことを、「活用Ⅱ」は探究との関係の比較的強い学習のことを指します。ともに同じ教師主導で誘導的に行う活動ですが、活用Ⅱは活用Ⅰより一段上のレベルのものとされて

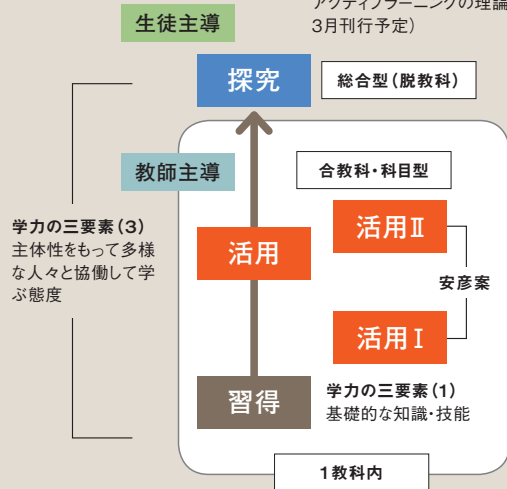
桐蔭学園で行っていることは、まさに学習指導要領にある「習得・活用・探究」の学習プロセスを具体化したモノ

教育理論も日々進化するなか 現場の教員の挑戦は続く



習得・活用・探究の学習プロセス

(※参考：安彦忠彦原稿、溝上編『高等学校におけるアクティブラーニングの理論』東信堂所収、2016年3月刊行予定)



います。
この概念に照らし合わせて先行事例などを見ていくと、「探究」と「活用Ⅰ」の部分は、結構行われていることがわかります。しかし、教科の中での「活用Ⅱ」にあたるものが、圧倒的に少ない。それを単元末の授業でいかに反映していくかが、桐蔭の先生たちとの挑戦の中で課題にもなっています。このような新しい取り組みは、常に手探り状態です。
理論を落とし込んだ授業案や問題案などを作っても、それで本当に十

分なのか……。しかも基本となる理論のフレームワーク自体も次々に改定されて、それまで考えていた授業案や問題案を変更しなくてはならなくなったり……。現場の先生からすれば、「コロナ変わったって、何を基準にすればいいのかわからない」という戸惑いの声にもなっているでしょう。
それだけ国や学者も揺れている時代、専門家たちでさえも揺れている中で、新しい教育を進めていかなければいけない。そんな時代に、今、先生方は直面しています。当然、一人の先生の考えや努力で何とかなるような課題ばかりではありません。だからこそ、横のつながりが重要です。
教員同士も「協働」し、常に学び、成長し続けることが大切
例えば桐蔭学園の場合は、アクティブラーニング推進委員の集まりが、ラーニングコミュニティとして成長していることが大きな支えとなっています。研修や合宿をとおして、お互いに思っ



ていることをすべて吐き出し、そうしてつながった深い連帯感が、その後の活動に非常に大きな影響を与えています。教科を超え、部署を超え、先生たちの間で「学び合う」文化ができてくつあり、それが非常に大きな効果を生んでいると思います。実際、「これまで同じ教科の教員としか指導の話をしたことがなかったのが、他の教科の先生とも『どうすればいい?』と話ができるようになった」「コミュニケーションが増えた」「活気が出た」と、多くの声があがり、教科を超えて話し合っている先生たちの様子が、他の先生たちにもいい影響を与えています。
私は、そんな先生たちの成長と変化のすさまじさを、驚きのまなざしをもって見ています。まさに、教師も「つながる」ことが大事だと実感しました。それによって、一人では成し遂げられないことへの挑戦が可能になり、学び続ける、成長し続ける力となります。
だからこそ、これからの教員には、

校内はもちろん、いろいろな研修会やシンポジウムなどに出て、外の世界と現場を「つなぐ」力が必要になるでしょう。また、すべての先生が外に出て行くことは難しいので、現場での課題を一般化して、外部から専門家を呼んだり、次の研修を組むファシリテーターやオーガナイザーのような働きを果たすミドルリーダーの育成も必要になるでしょう。そんな教員の姿も、これからの新しい教員像といえるのではないのでしょうか。

どんな高校生が大学、社会で成長するのか

『学校と社会をつなぐ調査』からわかった伸びる高校生のタイプ

溝上慎一 責任編集
京都大学高等教育研究開発推進センター
／河合塾 編 学事出版



高校2年生をこれから10年間にわたって追跡調査する「学校と社会をつなぐ調査」の、第1回目の報告。さまざまな学校の事例とともに、現在の高校生の特徴やキャリア意識などを説き、教育のあり方への課題なども提示する。

高校・大学から仕事へのトランジション

変容する能力・アイデンティティと教育

溝上慎一・松下佳代編
ナカニシヤ出版



高校から大学、社会へのトランジションにおける現状と課題について、社会学や心理学、教育学、労働経済学など、異なる分野の研究者9人が、それぞれの視点から執筆した書。学術論的に、今、何が起きているのかを鋭く説く。